



Theorizing Japanese Literature:
Modality, Adaptation, and Gender

要旨集

2025年8月25日・26日・27日

ソフィア大学

(Sofia University, Tsar Osvoboditel Blvd 15,
1504 Sofia, ブルガリア)

日程表

日時	2025年8月25日（月）～2025年8月29日（金）
会場	ソフィア大学（Sofia Center, Tsar Osvoboditel Blvd 15, 1504 Sofia, ブルガリア） ※8月28日・29日についてはエクスカージョンを予定

1日目（8月25日） 137講義室	
10:30～	全体打ち合わせ（可能な方をご参集ください。集合場所：ソフィア大学中庭）
12:15	参加者集合場所：ソフィア大学中庭
12:30～14:30	パネル：ジェンダー（古典） 司会：武藤那賀子
	パネリスト1：シュミット堀佐知
	「藪の中」原話再考——情けない夫、たくましい妻、そしてその妻をふった男の武勇伝
	パネリスト2：江口啓子
	異類物のジェンダー表象：狐の物語から見る異類と女性性
	パネリスト3：本橋裕美
	をこなる女の身体をめぐるイデオロギー コメンテーター：松井健児
Coffee break（14:30～15:00）	
15:00～17:00	パネル：亡霊 司会：ダリン・テネフ
	パネリスト1：安藤徹
	『源氏物語』の〈亡霊〉たち——憑在論の可能性——
	パネリスト2：池田大輔
	『絵入源氏物語』の挿絵が呼び覚ます物語
	パネリスト3：高木信
	戦後に取り憑く亡霊 コメンテーター：ダリン・テネフ
RECEPTION	

2日目（8月26日） 第二ホール	
9:00～11:00	個別打ち合わせ ※別途ご連絡いたします
12:15	参加者集合場所：ソフィア大学中庭
12:30～14:30	パネル：ジェンダー（近代） 司会：本橋裕美
	パネリスト1：ダニエラ・モロ
	円地文子「空華」（1966）における女性同性愛の表象 — 美と危険の二重性をめぐって
	パネリスト2：西原志保
	兎をめぐるクィアネス
	パネリスト3：マルティナ・ネディアルコヴァ
	フィルム・ノワールおよび探偵小説における女性の対象化の理論モデル コメンテーター：坪井秀人
Coffee break（14:30～15:00）	
15:00～17:00	ラウンドテーブル 司会：ダリン・テネフ

3日目（8月27日） 137講義室	
9:00～11:00	個別打ち合わせ ※別途ご連絡いたします
12:15	参加者集合場所：ソフィア大学中庭
12:30～14:30	パネル：モダリティ 司会：高木信
	パネリスト1：ゼバスティアン・バルメス
	日本古典文学の叙法：語りの〈距離〉と〈確実性〉を中心に
	パネリスト2：西野入篤男
	翻訳・翻案における和歌の再構築——モダリティと詩的空間の変容——
	パネリスト3：ダリン・テネフ
	ストーリーの可能態と主人公の可能態の狭間—川上弘美『某』を読む コメンテーター：久保蘭愛
Coffee break（14:30～15:00）	
15:00～17:00	パネル：アダプテーション 司会：本橋裕美
	パネル1：加藤希
	神話の語り直し—『先代旧事本紀』は翻案作品か—
	パネル2：アンダソヴァ・マラル
	ラフカディオ・ハーンが語る「出雲」—明治期にみる古代神話の再生
	パネル3：富澤萌未
	連動する物語・絵・和歌の様相
	パネル4：武藤那賀子
〈八橋〉の翻案から読み解く「東下り」（『伊勢物語』第九段）	

4日目（8月28日（木））：エクスカージョン1

5日目（8月29日（木））：エクスカージョン2

※4日目、5日目のエクスカージョンについては別途お知らせを御覧下さい。

【ジェンダー（古典）】

「藪の中」原話再考

——情けない夫、たくましい妻、そしてその妻をふった男の武勇伝

シュミット堀 佐知

周知のとおり、平安末期に成立した説話集『今昔物語集』所収の、「妻を具して丹波国に行く男、大江山にして縛らるること」（第29巻23話）は、芥川龍之介の「藪の中」（1922年）の原話であり、さらに「藪の中」は、黒澤明の『羅生門』（1950年）の原作として、人口に膾炙している。その結果、「妻を具して」は20世紀以降、国内外で広く知られる説話となったのだが、認知度の高さとは裏腹に、物語の内容は正しく理解されていないようだ。その最たるものは、日本語・英語を問わず、「妻を具して」のメタナラティブ（現代語訳・脚注/頭注・解説・研究論文など）が、盗賊と旅の女の性行為を、ほぼ例外なく、前者による後者への一方的な性暴力だと解釈していることである。本稿では、説話中の性行為が「強姦」のようなものではないだけではなく、女が行為後、盗賊に取引——自分の夫と決闘して勝てば、あなたの妻になります、というようなもの——を持ち掛けたものの断られてしまった、という展開を読み解く。物語内の性行為を性暴力とする読み方は、村松梢風・澤田撫松が1929年に出版した、「妻を具して」の最も古い現代語訳にすでに見られる。この翻訳には様々な問題があるのだが、中でも最も深刻なのは、盗賊が女に言う台詞にある「其ここに男をば免^{ゆる}して殺さずなりぬるぞ」という部分を、「お前に免じて、（夫の）命だけは助けてやる」と訳したことであろう。本稿でも解説するように、これは文法的・語彙的に不可能な解釈であり、もちろん、そのようなこじつけが100年近く、無批判に継承されてきたという点も見逃せない。しかしながら、本稿の目的は、単に先人の間違いを指摘することではない。筆者の研究テーマは近代日本の The Great Amnesia、つまり、明治の知識人たちが「アジア系西洋人」に生まれ変わるべく自らに課した、性（gender & sexuality）の歴史に関する「偉大なる健忘症」であり、村松・澤田による中世説話の解釈も、その影響下にあることを論じたい。また、夫が自分の愚かさのため、危うく妻に見捨てられそうになり、その危機は免れたもののその妻に罵倒された、という笑話を改作し、妻の不貞が、殺人よりも重い罪悪であるという世界観を、芥川が書こうとした背景には、キリスト教文化圏の性道徳を盲目的に受け入れてきた、明治以来の知識人に対する彼の批判精神は読み取れないだろうか。

異類物のジェンダー表象：狐の物語から見る異類と女性性

江口 啓子

本発表では、お伽草子の異類物に登場する「狐」に注目し、異類婚姻譚における異類を介したジェンダー表象について考察する。

お伽草子で狐はしばしば美しい女性に姿を変え、人間の男性と結ばれる。このような異類婚姻譚は、異類という異質な存在との交流を通じて、人間の社会や価値観を相対化する役割を担う。また、狐のジェンダー属性に着目すると、狐の表象には当時の理想的な女性像が反映していることがわかる。狐の場合は従順で献身的な妻や子を慈しむ母といった側面がよく描かれている。その一方で、狐は妖艶さや狡猾さを備えた悪女として描かれることもある。こうした狐の表象は、社会規範に沿う存在でありながら、それを揺るがす存在でもあるという両義性を帯びているのである。

本発表では、お伽草子の具体的な事例を通じて狐が持つ多面的なジェンダー表象を明らかにし、さらに現代に至るまでにどのような変化を遂げていったのかについて考察する。

をこなる女の身体をめぐるイデオロギー

本橋 裕美

『源氏物語』を中心とする平安文学研究は、早い時期からジェンダー論に応答してきたにもかかわらず、それがフェミニズムと連動するのを拒否し、古典に閉じたジェンダー批評とフェミニズム作品としての『源氏物語』称揚に留まってきた。確かに、『源氏物語』は前近代の女性たちの声を響かせるものであり、彼らの声に敏感に反応することで日本古代社会のジェンダー規範を浮かび上がらせることができるし、それが同時代に書かれたという事実によって規範の揺らぎもまた見ることができる。その有用性は疑いないが、一方で、『源氏物語』の「女性たちの声」が対象とするのはその思考や葛藤が語られることを認められた特権的な女性たちである。(だからこそ、特権的な女性たちが好んで『源氏物語』の読みの発信者となってきた。)

『源氏物語』における「をこ」とされる女君、今回は特に近江の君を取り上げて、彼女の物語がどのように制限され、語られているか、また一方で彼女と連帯しようとする現代の漫画における表象のあり方について考えてみたい。

【亡霊】

『源氏物語』の〈亡霊〉たち—憑在論の可能性—

安藤 徹

ジャック・デリダに由来する「憑在論」は、『源氏物語』というテキストを研究する方法的視座の一つとなりうるのか。

なりうるとすれば、それはどのようにしてか。

そして、そこにどのような可能性があるのか。

こうした探究の旅に出るための準備として、まずは複数の視点から『源氏物語』に取り憑く〈亡霊〉(的なモノ)たちを浮かび上がらせることを試みる。

『絵入源氏物語』の挿絵が呼び覚ます物語

池田 大輔

平安中期(1008年)頃に成立したとされる『源氏物語』は、長く享受されてきた文学作品である。特に江戸時代初期(1650年)に刊行された『絵入源氏物語』は、全テキストに加え、226図もの挿絵を収める版本で、挿絵は半丁もしくは見開き1丁で描かれ、物語内容を視覚的に補完する新しい読みの方法を提示した。本発表では、『絵入源氏物語』に焦点を当て、そこに描かれた「死者の霊」の挿絵とテキストの相互作用を取り上げる。そこから、「死者の霊」が物語の現在を「過去の現在」として、そして「予言的未来」へと繋ぐ「憑在」としての意味を考える。特に、『源氏物語』における「死者の霊」は、単なる過去の記憶や幻影ではなく、むしろ「今、ここにはいないが、決して逃れられない」存在として、物語の現在に介入し、その連続性を攪乱しながらも、同時にその深層で過去と現在を繋ぎ止め、そして未来へと突き動かす媒体として機能している。「死者の霊」がその姿を現すとき、作中人物たちはその「呼びかけ」に応答せざるを得ず、生者たちの中に抑圧されていた「感情」——それは時に罪悪感、後悔、あるいは抑えがたい愛着など——が呼び覚まされる。これは、生者が死者に対し、あるいは現在が過去に対し負う「応答の責任」を問う問題をはらんでいる。「死者の霊」が文字情報としてのみならず、挿絵によって「視覚化された過去の生者」として示されたとき、物語がどのように揺さぶられるのか。挿絵は、本来目に見えないはずの「憑在」を視覚的な形にすることで、その曖昧さを捉えつつ、見る者に物語の深層を、より強烈に、そして不穏な形で体感させる。この視覚的な現れが、『源氏物語』の多層的な時間性と存在論をいかに再構築し、読者の想像力に働きかけるのかを問いたい。

亡霊に取り憑かれた戦後—リプレゼンテーションズ・エッチ—

高木 信

小沼丹という作家がいる。第三の新人に分類される私小説作家とされる。一九一八（大正七）年、東京に生まれ、一九九五（平成六）年に死去している。「大寺さん」を主人公とする《大寺さん》シリーズがある。

《大寺さん》シリーズを中心に置いた同時期の短編群の特徴として、過去の曖昧な想起と軽やかな諦念とがある。大寺さんが忘れてしまったとしながら覚えている事柄を中心に連想的にテキストは構築されていく。忘却と想起と語る（語り方を含む）の問題がここに浮上する。

そして、想起される事柄の多くは、もういなくなってしまった人である。この「もういなくなってしまった人」を語ることの隙間に、死者が亡霊的に回帰することがある。この死者の回帰は、ときには怨霊的な回帰と言えるものもあるのだが—これは小沼丹の昭和の男性が持つ男尊女卑的な側面と繋がるのではないかと思うのだが—、ある瞬間、死者が大寺さんにそしてテキストに、取り憑くのである。その瞬間を捉えてみない。

また、死者を想起する大寺さんの記憶の背後に、戦争があるという見通しを持っている。逆かもしれない、死者を想起し語る時、戦争の記憶が張り付いているのではないだろうか。

このような点を論じてみたい。

【ジェンダー（近代）】

円地文子「空華」（1966）における女性同性愛の表象

— 美と危険の二重性をめぐって

ダニエラ モロ

本研究は、円地文子の短編「空華」（1966年）を、戦後日本における女性同性愛表象の文脈に位置づけ、その文学的意義を再考する試みである。三島由紀夫の『仮面の告白』（1949年）が男性同性愛のアイデンティティを文学的に表現し始め（伊藤 2020）、1950年代後半には「ゲイブーム」が起こった一方で（三橋 2016）、女性同性愛はなお曖昧な位置に置かれ、「親密な友情関係」あるいは「危険な関係」といった二項対立的な枠組みに閉じ込められていた。社会的に許容されていたのは、女性同士の一時的で非性愛的な親密性、すなわち「姉妹関係」や「S関係」と呼ばれるものであり、それは芸妓の世界や女子学校など、女性のみ環境において生じたものであり、吉屋信子のベストセラー『花物語』（1916～1924）に代表される文学的実践においても体現されていた。

「空華」は、こうした複雑な文化的・社会的背景の中で、女性同士の親密性を多面的に描出した作品である。円地はこれまでも女性同性愛のテーマに取り組んできたが、この側面は彼女の文学活動の中でもほとんど注目されてこなかった。円地自身も本作を収録した作品集『都の女』（1975年）のあとがきにおいて示唆しているように、「空華」は「純文学」として執筆されていなかったと思われる。

本稿では、物語構造、登場人物の造形、語彙選択といった叙述的手法を分析し、日本における同性愛に関する既存の研究を参照しつつ、「空華」の位置づけを試みる。特に注目したいのは、いわゆる「レズビアンブーム」（Welker 2017）の直前にあたる1966年に、異性愛者であると自認する女性作家によって執筆され、現代の語法で言えば「レズビアン的」な関係を明示的に描いたこの作品を、どのように読解すべきかという点である。

当時、当事者である吉谷伸子や田村俊子のような女性作家たちは、可視性も社会的正当性も乏しかった女性同性愛という自らの性的指向を肯定的に描くことで、社会における偏見やステレオタイプに対抗しようとした（加藤 2016）。それに対して、「空華」は女性同性愛への独自の文学的アプローチを示す作品だと考えられる。本作では、円地が女性同士の関係性を、美的側面と危険性という相反する要素を両義的なものとして描写している。当事者ではない作家がいかにか女性同士の愛を捉えたのかを検討することで、女性同性愛文学の中でも、当事者による自己表現とも、男性の視線による搾取的表象とも異なる、「空華」の立場を照射することを本研究の目的とする。

兎をめぐるクィアネス

西原 志保

古典説話から近現代小説まで様々な文学に登場する兎には、多様なイメージがある。例えば、多産であることから豊饒さが重ねられ、月の兎や水に映る月のイメージから月や水と結びつく。近年は反毛皮運動や反動物実験のアイコンとなり、多頭飼育崩壊の問題や、子宮癌の罹患率の高さから避妊手術が推奨されるもする。とりわけ注目したいのが、食べられる動物であると同時に家族として愛玩される存在であることである。

そこで本発表では、近現代文学におけるいくつかの兎表象を見た上で、生殖やジェンダーとの関わりを論じたい。特に作家・批評家・翻訳家・詩人・児童文学紹介者の矢川澄子『兎とよばれた女』（1983年）における「兎」について論じる予定である。

フィルム・ノワールおよび探偵小説における

女性の対象化の理論モデル

マルティナ ネディアルコヴァ

口頭発表は、三つの主要な部分から構成されている。第一部では、マックス・ブラック(Max Black)、ローマン・フリッグ(Roman Frigg)、ダリン・テネフ(Darin Tenev)といったモデル理論の研究者たちによって提示された理論モデルの基本的特徴、特にフィクション分析への応用について簡潔に要約する。第二部では、フェミニスト映画批評家のローラ・マルヴィによる理論を、彼女の論文「視覚的快楽と物語映画」(1975年)に基づいて整理する。マルヴィは、フロイトおよびラカンの精神分析用語・概念を用いながら、1) 映画鑑賞に伴う能動的(*active*)かつ自己愛的な視覚快楽嗜好(*narcissistic scopophilia*)が通常の心理的作用として生じること、そして 2) 映画の主人公において喚起される去勢コンプレックスが原因となって、フェティシズム的(*fetishistic*)または窃視症的(*voyeuristic*)傾向が現れる過程について論じている。

これらのマルヴィの視点に基づき、私はフィルム・ノワールにおける女性の対象化を表示・解釈する理論モデルを提示し、そのモデルの適用性を二つの作品に対して検証する。それらの作品は、江戸川乱歩の小説『黒蜥蜴』(1934年)と、深作欣二監督による映画「黒蜥蜴」(1968年)である。最後に、同一ジャンル(ノワール)に属する異なる芸術(文学と映画)に対し、単一の理論モデルを適用することの可能性と限界について考察する。

【モダリティ】

日本古典文学の〈叙法〉：語りの〈距離〉と〈確実性〉を中心に

ゼバスティアン バルメス

ジェラルド・ジュネットの『物語のディスクール』において、〈パースペクティブ〉（〈視点〉）と〈距離〉が共に〈叙法〉として定義されている。〈距離〉は物語内容と物語言説の関係、または読者が語られた出来事に対して感じる距離のことを指す。基本的に、直接言説には〈距離〉が最も小さく、語り手が顕著であると〈距離〉が大きいとされてきた。ジュネット以後のナラトロジー研究の多くは〈視点〉を問題としながら、それに比べて〈距離〉を取り上げる研究が少なかった。〈距離〉は語り手がどれだけ潜在的あるいは顕在的であるかによって定義されてきたことがその原因と思われるが、特に日本古典文学を読むとき、そのような定義の有効性について疑問を抱く。

前近代の物語において、物語の情報が詳細である、すなわち〈距離〉が小さいはずの部分でも語り手が顕著である例が少なくない。その上に、日本語はヨーロッパの言語と違い、文法的な特徴のうえで直接言説と間接言説が必ずしも区別できるわけではない。したがって〈距離〉は語り手の介入、あるいは話法ではなく、物語の情報量のみによって規定されていると考察する。

ただし、〈視点〉と〈距離〉だけで日本古典文学の〈叙法〉が尽くされているとは言い難いであろう。日本語において、項（argument）——とりわけ主語——が省略されることが多いことは周知のことだが、このような日本語の特徴を利用しながら、あいまいな語りを技法にしている場合があるので、物語の体系的な理論にもそのような現象を考慮すべきだと考える。本稿では、陣野英則氏が提唱した〈対象化のゆるさ〉を出発点とし、〈叙法〉のもう一つの範疇として〈確実性〉を提案する。そのような〈確実性〉は〈距離〉と同じように情報量に関する問題だと思われるかもしれないが、実は根本的に異なると論じる。

翻訳・翻案における和歌の再構築

——モダリティと詩的空間の変容——

西野入 篤男

和歌の解釈は、単なる言語理解を超えた多層的な営みである。三十一音という極めて制限された形式の中に、自然、感情、思想、歴史が凝縮され、掛詞や縁語、本歌取りといった修辞技法が多義的な意味を生み出していく。さらに、仮名文字の特質が、意味の余白や解釈の揺らぎを生み出し、読み手の感性や想像力に委ねられる詩的空間を形成していく。

このような和歌の多義性は、外国語への翻訳・翻案を通じて一層明確になる。日本語特有の修辞や文化的象徴性は他言語に置き換えにくく、翻訳者はしばしば大胆な意識や文化

的再構成を迫られることとなる。和歌の翻訳・翻案は、単なる言語の置き換えではなく、原詩の文化的背景や美的感性を異なる言語空間で再構築する創造的な営みである。その過程で、日本語の語法や仮名文字の表記がもつ曖昧性、さらには和歌とは異なるジャンルの特質が意識化され、言語と詩形の特質が交差する場として機能する。

本発表では、和歌の解釈における多様性と、その多様性が翻訳・翻案の過程でいかに顕在化するかを考察する。具体的には『新撰万葉集』という、和歌とそれを翻案した七言絶句を併記するという独自のスタイルを有するテキストに注目する。この翻案には、語りの主体や意味の揺れにモダリティの問題が関与しており、翻案の方法論そのものが現代の文学理論を捉え直す視座として機能し得ることを考えてみたい。

ストーリーの可能態と主人公の可能態の狭間

—川上弘美『某』を読む

ダリン テネフ

一つのストーリーが発展していくとき、その道筋が可能であった諸方向を次から次へ削除していく。いい換えれば、ストーリーには様々な可能性があるが、その中の一つの可能性が実現することで、その可能性が尽くされ（もう可能でなくなる）、それ以外の可能性が妥当でなくなり、消滅されてしまう。ストーリーのその論理を「ストーリーの可能態」と名付けたい。一方、ストーリーの可能性が尽くされるということは、必ずしも主人公の可能態が尽くされるということ意味するのではない。例を挙げると、東野圭吾の推理小説によく出てくるガリレオという物理学者がいるが、それぞれの事件が解決することで小説のストーリーが終わっても、ガリレオの可能態が尽くされることはない。

ストーリーの可能態と主人公の可能態が必然的に区別されているのではないが、その絡み合いを考察する必要がある。

川上弘美の『某』（2019）の中で名前も、記憶もない、性的に未分化である「某」という存在が突然あらわれ、最初は医師の実験で、そのあと自分の意志で、いろいろなひとになる。アイデンティティを持っていない某が女子高生や男子高生や教職員等々に変じて、ストーリーが発展していく。木村朗子が指摘しているように、この小説はメタフィクションとして読める。人物の設定が小説の中に行われ、虚構主人公とは何か、という問いが都度都度提起されている。主人公がいかにストーリーに依存しているか、いかにストーリーの可能態を違反して、越境しているかを、『某』が示唆している。

『某』を解説することで、虚構人物の可能態の構成を考察したい。

【翻案】

神話の語り直し—『先代旧事本紀』は翻案作品か—

加藤 希

平安時代初期に成立したとされる『先代旧事本紀』は、『古事記』『日本書紀』などの先行する神話・系譜・歴史資料を踏まえつつも、独自の語句や文章を加えて再編成された文献である。本報告では、これを「翻案」という観点から捉え直し、テキスト間の関連性を分析する。現在の翻案研究では異なるメディア間の変換に注目が集まりがちだが、同一媒体間においても構成・語り・人物造形の改変は翻案として成立し得る。『先代旧事本紀』における『古事記』『日本書紀』からの引用や語り直しがどのように行われているかを具体的に検討し、『先代旧事本紀』が独自の語りを持った翻案作品としてどのような特徴を有するかについて考察する。

ラフカディオ・ハーンが語る「出雲」

—明治期にみる古代神話の再生

アンダソヴァ マラル

ラフカディオ・ハーンは名著『知られぬ日本の面影』において出雲を神々の国の首都ととらえ、出雲に関する多くの記述を掲載している。その中で、島根半島の形成、出雲大社の成立や歴史、祭神であるオホクニヌシについて『古事記』や『出雲国風土記』の神話を元にしながら述べている。さらに、出雲国造と対面したときの感想や面談の内容、土地の人から聞いた伝説や風習などについても触れている。こうした出雲に関する記述は古代神話を元にしながらも、明治期における信仰や風土を伝えている点で注目される。

ラフカディオ・ハーンの古代神話への関心はチェンバレンの『英訳古事記』に起因しており、チェンバレンとの交流・友情を背景にしていることが知られている。しかし、西洋の学術思想を背景とする近代的な枠組みの中で『古事記』をとらえていたチェンバレンに対して、ハーンの出雲への視線は「風変わりな迷信や、素朴な神話や、奇異な呪術」に脈打つ「精神」に向けられ、チェンバレンとは対照的だった。本発表ではラフカディオ・ハーンの出雲への理解を表出し、そのチェンバレンとの対比から、西洋的近代へのアンチテーゼとしてのハーンの姿を捉えてみたい。

連動する物語・絵・和歌の様相

富澤 萌未

『源氏物語』の「絵合」巻、「蓬生」巻、「蛩」巻にあるように、古くから物語を絵に翻案する試みは盛んにおこなわれてきた。和歌の世界においても、白居易の『長恨歌』の絵に寄せて詠まれた『伊勢集』や『道命阿闍梨集』、『後拾遺集』の和歌、菟原処女の伝承の絵に寄せて詠まれた『大和物語』147段の伊勢らの和歌、『古本住吉物語』の絵に寄せて詠まれた『能宣集』の和歌、そして未詳物語の絵に寄せて詠まれた『橘為仲集』（『古本住吉物語』の絵とも推定）や『公任集』の和歌がその例として挙げられる。

一方で、絵をもとにして物語が生み出されるケースも存在する。屏風歌や障子歌の中には、特定の筋書きを持たないが、季節の移り変わりなど定型化された絵画群を、まるで一篇の物語のように詠んだものが『伊勢集』や『貫之集』などに見られる。

このように、物語を絵へ翻案することと絵を物語へ翻案することが、同時期に並行しておこなわれていた。本発表では、絵がどのように新たな和歌や物語の生成に繋がっていったのかを考察したい。

〈八橋〉の翻案から読み解く「東下り」（『伊勢物語』第九段）

武藤 那賀子

『伊勢物語』第九段「東下り」は絵画に翻案される場面が多い。三河国の八橋、駿河国の宇津の山、富士の山、武蔵国と下総国の境の隅田川と、全ての場面が絵画になっている。三河国の八橋の翻案のバリエーションは、これらの中で最も多岐にわたっているといえる。具体的には、絵画のみならず、工芸品や庭園様式、花札、屏風が挙げられる。本発表では、複数の〈八橋〉の翻案を確認し、「翻案から取りこぼされたもの」に焦点化して論じていく。